



風狂

第54号

風狂の会

風狂（第54号）目次

詩

海驢と髭男—— 夢の記憶（2） ——

不揃いな夜回り

月山富田

孤独の練習

命令と愛の方程式

ルフィーノ タマヨ（メキシコ）

原 詩夏至

なべくら ますみ

出雲 筑三

高 裕香

高村 昌憲

長尾 雅樹

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十八）

三浦 逸雄

エッセイ

老人の冷水（続き）

『収容所群島』から学ぶもの

チェルノブイリ そして福島（2）

北岡 善寿

神宮 清志

高島 りみこ

翻訳

アラン『大戦の思い出』（二十）

高村 昌憲 訳

執筆者のプロフィール

そこは中国の奥地らしいのだが
どこか南米の陽の香りもする
車中で仲良くなった母子連れは
駅から直ちに街に向かうらしい
「でも、行きたいなら、そっちは遊園地よ」
左を指さし、女の子が言う
「分かった。後から、必ず追いつくから」
そう約束して、私は左へ行く
遠くに大きな白木造りの
公衆便所がある
まるで神社だ
道は泥濘み
あちらこちらに
何故か海驢あしかの顔が覗いている
海驢は私が近づくと警戒して
忽ち顔を引っ込め
後には穴だけが点々と残される
私は路面の方々に残された
泥穴を一つ一つ覗き込む
「到底駄目だ、これは……」
そう呟き引き返すが
だが、では、遊園地とは一体……
「いや、待てよ。さっきの公衆便所……」
そうか、あれが遊園地だったのか
私は半ば呆れ半ば感嘆して
その白木の社殿に足を踏み入れる
便器は和式で少し大きすぎ
屈むと両腿に負荷がかかるのだが
奥から手前に絶えず流れている
水流はあくまで豊かで清冽だ
用を終え更に奥へと進むと
水源はタンクを兼ねた湯舟で
来訪者は無料で入浴できるらしい
「ああ、極楽……」
外の密林を見ながら
のんびり旅の疲れを癒していると
彼方からのっそり近づく者
見れば浅黒い半裸の髭男で
どうやら地元の先住民のようだ

窓越しに私の鼻先まで顔を近づけ
やがて無言で踵を返して
再び森へと去って行こうとする
「お待ち下さい、どうです、一緒に……」
そう呼びかけたが
男はとうとう
振り返らなかった

聞こえてくる音
拍子木の
寒そうな響き
不揃いな

どんな人達が叩いているのか
若くはなさそうな声の連なり
ばらばらと重なり合って
足音もよたよたと着いて来る

ヒ～ノ～ ヨウジ～ン ジ～ン
ヒ～ ヒ～～………… ようじ～ん

窓の外に行く
午後八時三十分
善意の
或いは
無理強い の 誘いに
着いて行かなくてはならない
夜回り
キワミ的寒さだろう
今日で三日目の

遠のく声
遠のく音
不揃いな
拍子木の
若くはない声の連なり
暗がりに転んだら
この寒さに
風邪をひいたら

そんなこと言う人は一人もいない
何はともあれ

皆素直について行く

ひ～の～ よう じ～ん じ～ん

願わくば

我に七難八苦を与えたまえ

土に沁み入りたまえ 血よ魂よ

さすが難攻不落のわれらが城

攻める立場に変わり

若き日の迷いの付けをいま憂う

岩窟の隠し井戸はまだ生きていた

ありがたき宝水の冷たさ

腕白だった頃と同じまるやかさ

他利にまで 目が届かなかった

昇りつめた身になると

誰しもが墮ちる守旧派思考

蒸しかえすことは新たより難し

月は巧みに優雅に

円くなったり尖ったり 舞扇

山風が切りこみゴーと響く本丸跡

無念なり 山中鹿介の顕彰碑を照らすは

たそがれまぶしい陽光の紅

一人きりで過ごす夜は滅多にない。
新年が明け、
なぜだか氷点下の夜が続く。

夫は、お義母さんの介護で実家に
娘達は、美術館の展示で泊まり。
開放感のはずだかなんだか違う。

冷蔵庫の中のような家にポツリ
温かいはずのご飯も湯気が消え
温まるはずのお風呂も底から冷える。

早くから布団に潜り込んだが
猫でも犬でもいたほうがいい。
明日は、銭湯にでも行こう。

命令には従う方が良いと言うが
命令するには秩序が重要らしい
命令に抵抗する者は多くないが
命令する者は常に絶対ではない

親は子供に時間厳守を命じるが
成長すると勝手に家を外出する
教師は生徒に品行方正を言うが
卒業した途端何も言わなくなる

強い者が弱い者に命令し出すと
対等の関係ではなくなって来る
弱い者が強い者に服従し出すと
思考回路が錆びた様に固くなる

それでも弱い者は愛されている
弱い儘でないと愛されないのだ
女も強い男に愛されるのである
強い精神を持つと思考するのだ

強い者は愛されることを諦める
弱い者は愛されながら服従する
強い者は愛することを実践しろ
弱い者は愛することを忘却する

桃色の世界に酔いながら
不思議な遊行の世界に遊んでいる
眩しくめくるめく色彩の彼方に
甘味を帯びた夢酔の輪郭から
弦楽器を弾き鳴らす影の人が居る
視界の奥に嵌め込まれた絵姿
桃色の色調の明度が心を洗う
薄明の朝の景色の様に
仄かな走馬灯の軌跡を隠している
通り過ぎるのは高原に行く遊芸人
円型の光輪に照らされながら
遠い遠い山岳地帯の夜露を想う
夜は明けたか旅の宿は何処か
練瓦作りの家屋を通り抜けて
荒野の花の色を追い続ける
虹は果てしない宇宙を照らしている
心を静止させて笛の音を待っている
旅人の胸のさざめきが時を熟させる
光の輪を幾つも通り過ぎて
遠い世界の出来事のように呼吸して
生命の炎を音色の響きに流して
草原の甘酸っぱい雨が降り注ぐ
風を追ってはいけない
羊の鳴く声を虚空に聞くだろう
高原の風は涼しく胸一杯に充ちて
旅芸人の足跡が眩しく夢を踏む
桃色の絵具に塗り込められた画像から
生きる手答えを描写して
沈黙の言葉が数えられない意味を探している
心を澄ませて透明な過去を反芻する
これから何処へ行こうとするのか
回転する運命の音色を聞き分けながら
静かに掻き鳴らす連弾の響きを残して
何時までも歌い続ける旅芸人の後姿が在る



三浦 逸雄 「白日幻視」 8号（アクリル・紙）

私は臍が曲がっているのか、太平洋戦争は我が方の敗北に終わっているのだから敗戦と言い、終戦とは言わない。敵、身方勝ち負けなしに戦いを終ったのなら終戦でいい。負けて終ったのに終戦というのは恥を隠す修辞であろうが、多くの方は身を労るのか終戦という修辞に賛成のようである。極端なのは戦争に負けたという事実を認めようとしない者が、私の中学の同級生にいたということである。その男は陸軍士官学校在学中に敗戦を迎え、そのあと高等師範学校に入った。ある日彼は私の下宿に遊びに来て、日本は決して戦争に負けてはいないと何度も繰り返して力説した。私は反論しても無駄だと判断して話題を変えた。彼は師範を卒業すると郷里に帰り、教育の分野で活躍した。何年も経ってからだが、私は自分の郷里に帰った時に彼を訪ねて、彼が日本不敗を力説したことを話題に出した。彼は頭を掻いて苦笑いした。時が経って彼も日本の敗戦を認めざるを得なかったのである。

私自身のことを言うと、私は軍国主義の時代に育った人間であるにも拘らず、戦争が終った時ホッとした人間であった。死ななくて済んだと思ったからである。私たちは内地にいたので、外地の兵隊のように、連合国の兵隊と銃弾を撃ち合うことはなかった。悲惨であったのは、外地に派遣された部隊で、多くの兵隊が死んだ。中には玉砕と称して全滅する部隊もあった。沖縄は外地ではないが、米軍が真っ先に上陸して日本軍を掃討したところで、女学生や中学生までが戦闘に参加して死んだ。何故そういう戦争をしたのか。天皇を奉戴した軍の野望である。明治は西洋に追いつけ追い越せをスローガンにした時代である。日本の軍隊は日清、日露の両戦役で勝利を収め意気が上がった。第一次大戦のあと、日本は満州と中国に目をつけた。満州事変と支那事変である。事変は戦争でないことになっているが、満州事変はともかく支那事変は、戦線が拡大するばかりの戦争で、後に史書はこの戦争を日中戦争と名付けた。そしてこういう戦争を企んだ者は満州に本拠を置く関東軍の参謀板垣征四郎と石原莞爾であった。しかし中国戦線は拡大で泥沼化するのである。板垣は上海事変まで起こしたけれども、戦況に大きな変化はなかった。そのうちに昭和十六年十二月八日の太平洋戦争の勃発である。この戦争は日独伊三国同盟と英米を中心とする連合国の戦争であった。日本でもドイツでも開戦当初は華々しい戦果を上げた。しかし戦いは運である。いや運だけで勝敗は決まるものではなかった。その所有する物量と資源の差である。アメリカは続々と兵器を生産した。日本は資源も物量もないので、寺の鐘やら家庭の火鉢まで供出させ、金属がないので軍艦を作るのに木造船をもってするしまつであった。それでも、敵が上陸したら竹槍で戦うつもりでいたのである。そこへ運命の日が来たのである。二十年八月六日の広島と九日の長崎は人類初めての原爆の洗礼を受け連合国に無条件降伏をせざるを得なかった。そして戦争が終ったあと、ドイツでも日本でも戦勝国による軍事裁判が行なわれた。戦争責任を問われたのは主に軍人であった。（岸信介のように内閣にいた者も戦犯に含まれて講和条約が結ばれるまで巣鴨拘置所にいた）。戦犯軍人で最も目立ったのは陸軍出身で総理大臣を務めたことのある東条英機である。ドイツでの軍事裁判では、戦争の責任は自分たちにある、とナチスの幹部たちは言っているのに対して、日本での裁判では東条以下ひとりとして自分に戦争責任

があると言う者はなかった。ところが、私の持つ新聞の切抜きには、東条の法廷での発言があり、責任を逃れるために嘘を言ったのか、うっかり間違っただけなのか分からないが、理論上は曲げようのない君主の機能を言い当てているのである、新聞の記事に従って話を進めよう。

A級戦犯処刑から六日後の四十八年十二月二十九日、東条英機内閣で閣僚を務めた大麻唯男が、東条夫人の勝子を自宅に訪ねた。天皇が吉田に「東条ハ真直ナ人間デアル」と語ったのだという（保阪正康『東条英機と天皇の時代』）。

天皇は東条を信頼していた。「彼程朕の意見を直ちに実行に移したものはいない」（木下『側近日誌』）とも語っていた。東条は天皇の忠臣だった。

四十六年二月、天皇は侍従長藤田尚徳を前に次のように述懐した（藤田『侍従長の回想』）
「立憲国の天皇は憲法に制約される。憲法上の責任者（内閣）が、ある方策を立てて裁可を求めてきた場合、意に満ちても満たなくても裁可する以外ない。自分の考えで却下すれば、憲法を破壊することになる」

東条も四十七年十二月に法廷に提出した供述書で、立憲君主制の原則から「政治的、外交的及び軍事上の事項決定の責任は全然内閣及び統帥部にある」（開戦は）絶対的に陛下の御責任ではないと主張した。天皇に責任を及ぼさないのが東条の使命だった。

その東条が自分の使命を忘れたのか、四日後の法廷で「日本国の臣民が、陛下の御意志に反してあれこれすることはありません」と、忠臣の立場で答弁してしまった。これでは天皇が責任の主体になる。

この法廷での発言が尾を引くのである。新聞は武田清子の『天皇観の相克』の中で「（東条の）二つの相矛盾する発言内容の関係こそ、まさに、降伏前の天皇の地位の特質があったと手短かに結論づけるが、天皇の戦争責任の問題はこれを切っ掛けに識者の間で息を吹き返すのである。

「四十八年四月、東京裁判が結審し、再び退位論が盛んになった。東大法学部教授の横田喜三郎は読売新聞（八月二十六日付）で「最高の責任者がその責任を取ろうとせず、国民もまた責任をとらせようとせず、たがいにあいまいのうちに葬り去るならば、どうして真の民主国家が建設されようか」と述べた。

これから数行おいて、五十一年九月のサンフランシスコ平和条約が締結された時、東京日日新聞で論じられた評論家大宅壮一の文章が引用される。「「新生日本」の出発にあたり、「国民の気分を一新」させるために退位が必要だ」

更に巣鴨プリズンに服役中の木戸は、面会の家族に宮内庁幹部への伝言を託した。天皇は皇祖皇宗と国民に責任をとって退位するのが至当、さもないと皇室だけが責任をとらぬことになり、「何か割り切れぬ空気を残す」という内容だった（『木戸幸一尋問調書』）。（続く）

本を読むのには「鞍上」「枕上」「厠上」をもってよしという言い伝えがあると聞いた。少し調べてみると、十一世紀の中国の詩人にして学者・政治家の欧陽脩が言った言葉だそうで、説得力のある言葉だと思う。今風に言えば、「電車の中」「ベッドの中」「トイレの中」が読書には最適だということになる。定年退職後、通勤電車に乗らなくなって、読書量が減ったことは確かだ。

思えば通勤電車に乗って毎日通うのは苦痛ではあったが、読書という点ではその恩恵に与ったと言える。それしかやることがないとなれば、どうしても集中的に打ち込むことになる。電車に乗って本を開いた途端、その世界に没入できた。勤務先に図書館があったので、これも大いに有難かった。図書館と通勤電車、これによって充実した読書が可能になり、ろくな学校生活をしてこなかったわたしにとって、どれくらい有益だったか計り知れない。

ソルジェニツィンの『収容所群島』は、分量的にはトルストイの『戦争と平和』にまさる膨大なドキュメントである。これを読破するとなると、自宅の部屋で果たして出来ただろうか。これだけに集中した通勤電車の中であつたからこそ読破できたと思う。それと図書館にあったので、この本を手にとって読む気になったのだ。わざわざ買ってきてまで読むとはとうてい思えない。図書館と通勤電車、この条件のもとにこの大部の名作にどっぷりつかることが出来たのだと思う。この本を読んだとき、その感銘を後々まで残したかったのであろう、いくつかのコピーが取ってある。そのコピーによってもう一度そのときの感銘に迫ってみたい。

スターリン治下のソ連には、国内の至るところに収容所があり、何の罪もないひとを「反革命分子」の名のもとに逮捕して、強制労働に従事させた。飢えと寒さと過酷な労働の収容所生活が始まると、誰でも思い至る。それまでの生活がいかに幸せなものであつたか、いかに快適なものであつたか。（たとえ幸せでなくとも、快適でなくともだ！）「それにしても、利用しなかった可能性がなんと多かったことか！なんと多くのきれいな花を残してきたことか！……今やいつになったら、それを取り戻せるのか？……もし万が一そのときまで私が生き抜いたら――私は生まれかわったように、賢く生きるだろう！将来の釈放の日！――それは昇る朝日のように輝いている！そして、これが結論だ――その日まで生き抜くことだ！どんな犠牲を払っても！」

「どんな犠牲を払っても」とは、具体的には「他人を犠牲にしても」の意味だとソルジェニツィンは解説している。他人の犠牲なくしては生き残ることは難しい、これが監獄というところなのだ。

《生き抜くことだ！》という自分への命令は、生きものとしての自然な衝動だと、ソルジェニツィンは書く。そして次のようなエピソードを紹介している。

風呂場は、北極圏の雪原の中を五キロも歩いてゆかなければならない。衰弱した三十人の囚人たちが連行されて、その小さなひどい風呂場に五組に分かれて六人ずつ入浴する。風呂場の扉を開ければすぐに酷寒の外である。その酷寒の中で残りの四組の者が待っている。ある老人は、十年間もこんな風呂場に通って、五十歳から六十歳までの刑期を務め上げた。彼は釈放され、家族

のもとに帰った。温かく世話をみってくれるわが家で、彼は一か月で燃え尽きてしまった。生き抜くこと——という命令がなくなったからだ……。

監獄の中では肉体的には拘束されていて自由はない。しかし頭の中は自由だ、とソルジェニツィンは指摘する。「過酷な労働で死に至らしめるほどに露骨に要求してくる収容所の役人も、頭の中までは支配できない。モノを考えるには収容所も悪くない。何故なら最も肝心なことだが、集会というものがない。十年間一切の集会から解放されているのだ。誰一人入党の手続きをしなさいと説得する者は居ない。団体の会費を無理やり取り立てる者も居ない。決して宣伝員にされない。その宣伝を聞くこともない。誰も社会主義的責任を問う者は居ない。自分の誤りについての自己批判も、壁新聞もない。自由な頭…これこそ《群島》生活の特権ではないか。さらにもう一つの自由がある…家族や財産を奪われることがない。すでに奪われているからだ。ないものは神でも奪えない。これこそ確固たる自由ではないか。」

あたかも悟りを開いた修行僧のような言葉ではないか。極限状況下に生きるためには、その位の精神的修行が必要なのだろう。もうひとつ分かることは当時のソ連の国民にとって集会がいかに重荷だったかということだ。われわれの社会生活にも、諸々の集会というものがあるけれど、それほど重荷には感じていない。そればかりか壁新聞もなければ、自己批判を強要されることもない。それだけ自由の社会に生きているといえるのであろうか。

自由となった頭の中を去来したもの、それは多種多様であっただろうが、とりわけ自分への思いに強烈なものがあつた。「振り返ってみて、私は物心ついてからこの人生で自分自身をも、自分の志したものをも全く理解していなかったことを識った」と書く。若いときの成功に酔っていた彼は、自分がいつも絶対に正しいと信じて、その為に残酷だった。あり余る権力をもっていた彼は殺人者であり、弾圧者だった。…腐った監獄のわらの中に横たわっていたとき、はじめてそう気付いた。そうさせるのは、国家の間でも、階級の間でも、政党の間でもなく、一人びとりの心の中なのだ気付いた。我が国の高級官僚の無神経さや死刑執行人たちの残酷さについて聞かされるたびに、彼は大尉の勲章を付けて、東プロイセンを進撃していた中隊を思い出して、自分に言い聞かせた。「われわれのほうがましだったと言えるのか？」

かくて驚くべき言葉を書く。「監獄よ、お前に祝福あれ！私の人生にお前があつたことを感謝する！」

さらに言う「自由は墮落させるが、強制は教訓を与える」

今のわれわれの多くは「自由」の中で生きている。ということは墮落しているのであろうか。この問題を毎日考えてきたが、やはり墮落していることを認めなくてはならない、という方向へ思考しがちになる。とって自ら刑務所へ行こうという気になるかと言えば、まったくその気にはなれない。ところがソルジェニツィンは次のような例をぶつけてくるのである。

レフ・トルストイが晩年に近いころ、投獄されることを夢見ていた、これは正しいとソルジェニツィンは言う。「ある時点から、この巨人は枯れ始めていた。豪雨が旱魃に必要なように、監獄は彼に必要なだったのである！」

トルストイは偉大だと尊敬しておこう。ふと思う、われわれは確かに墮落しているだろうけれど、自由の中に居たい。これが正直なところであり、多くのひとが同じ思いであろう。「こう

長く平和が続くと、ずいぶん緊張感も薄れ、自堕落なことになってしまっている」ある時そのように言ったら、直ちに答えた。「戦争よりましだよ」...そう答えてくれたのは、一兵卒として兵隊に行った経験をもつ老人だった。「戦争よりましだ」...なんと重い言葉だろう。監獄と戦争は違うかもしれないが、似ている点もあるだろう。極限状況という点では同じ範疇のものであろう。戦争はまっぴらごめんだ、たとえ気が緩もうと堕落しようとする平和のほうがましだ、これが健全な感覚ではなかろうか。そして自由を求めて、いかに多くの人類が苦しみ戦い続けてきたことだろうか。

あるインテリたちが収容されているところの粗末な小屋の床が使用不能となり、横になれなくなった。飢えと寒さと無理な労働で疲労困憊しているうえに、寝ることが出来なければ、衰弱して死ぬしかない。インテリたちは立ったまま眠れぬままに自分たちの自由な時間をどう過ごしたか。ひとりが彼らを集めてゼミナールを開き、自分が知っていてほかのひとの知らない情報を講義した。するとある神父は神学を、エネルギー学者は未来のエネルギー学を、経済学者はソ連の経済がいかに失敗したかを講義した。会を重ねるにしたがって、参加者の人数は減り、彼らは死体安置所に移された。死を目前にしながら、こうしたことに興味を示すひとこそが真のインテリだと、ソルジェニツィンは称賛している。

長い地獄のような収容所暮らしにも終わるときがやってくる。刑期は終了したが手続きがなされていない、このとき監獄の庭で寝ることを許された。中庭の干草の上に寝て、夜空の下で寝られることに大感激した。

「どうしても眠れない！月の光の下を、私は歩きまわっている、歩きまわっている、歩きまわっている。ラバが歌を歌っている！ラクダが歌っている！私の心の中でも絶えず歌っている——自由だ！自由だ！」

このように喜びを爆発させているが、じつは本当の自由の身になったわけではなかった。刑期を終えても、政治犯はすべて永久流刑となり、ソルジェニツィンはカザフスタンに住み、与えられた仕事に就いた。初めに住んだ家は鳥小屋で、一番高い屋根の下に行っても頭がつかえた。土間に二つの箱を置いて寝床とした。石油ランプもない暗闇、そこでも幸福を味わうのであった。暗闇もまた自由の要素になり得る。暗闇と静けさの中で、木箱の上に横になり、無為の楽しみを味わい、「これ以上望むことは何一つない！」と書く。さらに「この地上には、不公平、不平等、奴隷制度のほかに、いったい何が永遠のものなのか？」と問いかけている。

「ひとたび机に向かうと、ペンの下から勢いよく文章が流れ出した。コルホーズでのビート収穫に駆り出されなかった日曜日には、朝から晩まで私はずっと書き続けた。」彼に残された課題は、それまで見た世界を記述することであり、やる気十分だった。

娑婆に戻って、いち早く孤独に逃げ込んだ。収容所に居たときから、森の奥で暮らすことを夢見ていた。他人との接触を避けて、自然の中へ逃げ込んだ。一本の白樺の樹に接吻したい気持ちだった。落ち葉の音を聞くと、音楽に聞こえて眼に涙があふれた。何時間でも静けさに耳を傾け、読書に耽った。「もし世の中に幸福があるなら、それは囚人が釈放されてから、一年のうちに味わうものだ！」

そして最後に次のように書く。「このような人は、長いこと何も持ちたくないのである。財産

というものは簡単に燃えたり、失われたりするものであることを、承知しているからである。
」「あたかも縁起を担ぐように、新しいものを避けて、着古したものを身につけ、壊れたものを家具に使っている。」またこんな発見をした。「平穩無事な人生を送ってきた人たちとは付き合いにくい。人間的に言えば、出世をあきらめた人だけが面白いのだ。出世を目指すひとは、うんざりするほど退屈なものだ。」

『収容所群島』はこのへんまでで終わっている。ソルジェニツィンが収容所の刑期を終えた年にスターリンが死に、その三年後にフルシチョフがスターリン批判を行い、肅清された者は名誉を回復した。ソルジェニツィンも無罪となり、流刑から解放されて中学校の教職に就いた。一九七〇年にノーベル文学賞を得るが、その四年後にソ連を追放され、一九九四年に帰国を果たした。二〇〇八年八月三日に八九歳で波乱にとんだ生涯を閉じた。

ソルジェニツィンの作品は、『収容所群島』のほかに『イワン・デニソビッチの一日』など数編読んだ。しかし質量ともに『収容所群島』が他を圧倒していると思った。この一大長編を読み通したということは、わたしにとってあまりに大きな衝撃であり、事件だった。こうしてこの本に関して何か書くのは、怖い気がして手を付けずに過ごしてきた。しかしファイルの中からこのコピーを見つけて読みだすと、その凄さに改めて目を奪われ、ほかのことが手につかなくなった。自分の表現の貧しさばかりを感じながら、以上のようなエッセイを書かずにいられなかった。

この本がわたしに与えたものは、...お前は自分に甘い！未熟だ！とわたしを地面に叩きつけてくれたことだ。わたしにはとても出来ない、トルストイのように監獄が自分に必要だと言い切ることなど。なんと弱いヤツだ！

やがて冷静にもどったとき、考え込んでしまった。マルクスが主張して、正しいと多くのひとが信じた社会主義という理想が、いざ実現してみるとどうしてこのように多くの国民を苦しめる体制になってしまったのか。独裁体制が大量虐殺を招来し、恐怖政治が人びとを苦しめた。肝心の経済も資本主義に後れを取って体制崩壊してしまった。マルクスの経済理論は間違っていたのだろうか。この疑問に対する解答はこれまで数々なされてきているが、納得できるものはまだ出ていないと思う。この正解はどこにあるのだろうか。 （了）

チェルノブイリ原子力発電所の爆発による火災の消火作業にあたったワーシャは、仲間の消防士とともにモスクワの病院に移送されたが、数日のうちに火傷が表面に出始め、体の色は青、赤、灰色がかった褐色と変化していき、飲食を受けつけることもできなくなってしまった。ワーシャは姉のリュウダから骨髄の提供を受け、骨髄移植手術を行ったが、様態は悪化する一方だった。血と粘液の混じった激しい下痢が続き、全身が水疱に被われた。付き添っていた妻のリュウシャが朝、新しいシーツに敷き替えても夕方には血だらけになってしまった。無防備に看護を続けるリュウシャに看護師が警告する。「ご主人は人間じゃないの、原子炉なのよ。一緒にいると死んじゃうわ」と。テーブルの上のオレンジは黄色からピンク色に変わっていた。

日本でも大量に放射線を浴びて亡くなった方の記録が残っている。「NHKスペシャル 被曝治療83日間の記録 ～東海村臨界事故～」だ。事故は1999年9月30日、茨城県東海村のジェー・シー・オー社（JCO）東海事業所で発生した。被爆した3名のうち2名が亡くなっている。そのうちのひとり大内久さんの治療経過を追ったドキュメンタリーがこの番組で、2001年に放映されている。臨界事故は安全重視のマニュアル通りの作業ではなく、効率化を図るためのずさんな裏マニュアルで作業をした結果、起きたものだった。大内さんはその作業が臨界に達する可能性があることを知らされていなかった。被爆した大内さんは放射線医学総合研究所から、被曝医療の専門チームのある東京大学医学部付属病院に移送された。移送された直後の大内さんは日焼けをしたような赤みは帯びていたものの、いたって元気そうに見えた。担当した看護師は「退院できる状態になるんじゃないかなってその時は思いました」と話している。しかし大内さんは被爆によって染色体を破壊されてしまっていた。白血球が急激に減少していったため、大内さんの妹から白血球を作る細胞を移植した。この治療はワーシャの骨髄移植手術と同じ効果を狙ったものなだろう。10日後、大内さんの体に異変が現れた。治療用テープを剥がすと皮膚も一緒に剥がれてしまう。新しい皮膚を作ることができなくなっていたのだ。そしてワーシャと同じように大量の下痢が始まった。免疫細胞も異常をきたし、移植した妹の白血球までも攻撃するようになり、障害は全身に広がっていった。被爆から83日目、医師たちの懸命の治療と家族の快復への願いも届くことなく、大内さんは息を引き取った。医療チームのリーダーだった前川医師は番組の中で「今回のことで感じるのは、やっぱり人間の作ったものは、一步間違うととんでもないことになるなど。そのとんでもないこともほんとに我々一介の医師がなんともしようがないと。たとえどんな最新の技術や機器をもってしても、とてもとても太刀打ちできない破滅的な影響をもたらすんだなということは実感しました」と語り、大内さんの妻は前川医師に宛てた手紙の中で「とても悲観的な考えなのかもしれませんが、原子力というものにどうしてもかかわらなければならない環境にある以上、また同じような事故が起きるのではないのでしょうか。しょせん人間のすることだから、という不信感は消えません。それならば原子力に携わる人たちが、自分たち自身を守ることができないのならば、むしろ主人たちが命を削りながら教えていった医療の分野でこそ、同じような不幸な犠牲者を今度こそ救ってあげられるよう祈ってやみません」と綴っている。

ワーシャは放射線病棟に入院してから14日で亡くなった。遺体は放射能が強いため亜鉛の棺に収められ、ハンダづけをしたのち、コンクリートの板を載せられてモスクワの墓地に埋葬された。2ヶ月後、妻のリューシャは女兒を出産したが、生まれた子どもは肝硬変と先天性心臓欠陥のため4時間後に息を引き取り、ワーシャの隣に埋葬された。

リューシャにインタビューを行い、『チェルノブイリの祈り』を書き上げたスヴェトラナ・アルクシエーヴィチは本書の中で「この本はチェルノブイリについての本じゃありません。チェルノブイリを取りまく世界のこと、私たちが知らなかったこと、ほとんど知らなかったことについての本です。見落とされた歴史とでもいえばいいのかしら。（中略）チェルノブイリは私たちが解き明かさねばならない謎です。もしかしたら、二一世紀への課題、二一世紀への挑戦なのかもしれません」「一人の人間によって語られるできごとはその人の運命ですが、大勢の人によって語られることはすでに歴史です。二つの真実——個人の真実と全体の真実を両立させるのはもっともむずかしいことです。今日の間人は時代のはざまにいます」と綴っている。

チェルノブイリ原発事故から25年、東海村臨界事故から12年後の2011年3月11日、東日本大震災により福島第一原子力発電所事故が発生した。8年が経過しようとしている今、私たち、そしてこの国は事故をどのように捉え、どこへ向かおうとしているのだろうか。（つづく）

参考文献

- 『チェルノブイリの祈り 未来の物語』スヴェトラナ・アルクシエーヴィチ著・松本妙子訳（岩波書店）
- https://blog.goo.ne.jp/flyhigh_2012/e/a4ff2290232f8573e9d639dda089c729 ブログ「風の谷」NHKスペシャル 被曝治療83日間の記録 ～東海村臨界事故～

第十六章

この頃にドオモンは取戻されました。そのことは我々の右手にあるマール城塞の斜面の上で、最早敵が見渡していないことになりました。そして大尉はこの地方における、砲台の可能な設置位置を偵察しなければなりませんでした。私は角度を測る軽量の器具と大縮尺の地図を持ちながら、大尉に同伴しました。それは大した危険も無い半日仕事でした。しかしながら私は、我々の右手の奥地にあった農家を砲撃した恐るべき百三十ミリ砲が消えているのに気付いた通路を思い出しております。ひゅるひゅるという音がする度に、大尉は頭を引っ込めますし、私も大尉と同じ様に引っ込めました。面白いのは私たちが二人で地図を広げていることです。私たちは注目すべきあらゆる地点を発見しては目印を付けました。その後で監視地点であった弾薬の古い保管所に到着した時、私たちは誰もが騙されていることに気付きました。ゴンティエのいる処に到着しないのです。何故ならこの計画に関しての報告は、大尉の仕事でもあったからです。結局のところその仕事は行われたのであり、しかも上手に行われたのです。私たちは明るい気分で再検討しました。それから大尉は、最良の陣地を確実なものとして私に告げました。私としては金利生活者の様な楽な仕事でした。彼はもう私を扱き使おうとしませんでした。少し後で言ったことですがそれは正しかったのです。私は休暇に入っていたからです。彼は年取った民間人たちと活発に話しましたが、彼らは気さくな言葉しか使いませんでしたし、その時の彼らはお手本に報い得たのでした。「あなた方はそれをあなた方自身に見ます。その仕事は危険になり得るかも知れませんが、厳格ではありません。そして自発性という個性は、多くが勇気を高めるために生まれるに違いありません。私たちの部下たちには、その様なお手本が大いに必要とされているのです。そして彼らが八十歳になった時に彼らも到達出来ると良く言って下さい。彼らは結実するでしょう」。彼の考えは正しいと私は信じます。そして私がその時に理解したのは、片足が駄目になった私であっても守れると彼が思ったことでした。その時から彼は、うっかり秘密を漏らすことや諜報部とかその種のものについて、何か形式張らない話を私と行うつもりでいました。防衛上の意に反していても、部下たちは自分たちがいる場所を書いたり言ったりすることを自らに禁じていませんでした。でも、郵便物係下士官が、未亡人に手紙を書くために彼女の夫がどの様な村で埋葬されたのかを、記載する時は改竄されていました。それでも、そのことや他のことにも感謝していると大尉に手紙を書いていたのをその未亡人から知らされたのは、自然なことでした。部下たちは、これらの詳細なことが何ら重要なものではないとは理解しませんでした。彼らは正しかったと私は思います。非常に広く伝えられていて、しかも非常に巧みに指導されていたスパイ行為に対して、私たちが知ることは重要であったとは全然分かりませんでした。私たちはヒンデブルク・ライン(1)の後退にびっくりさせられました。誰もが未だ信じ様としなかった時に、それは行われました。私たちはシュマン・デ・ダム(2)にもびっくりさせられましたが、その時私たちの師団は北部に集結しました。しかし、このスパイ行為の教条主義と大変合理的な情報の合致方法は、そこに参戦している人々を熱狂させますし、それらを考え出した人々は更

にもっと熱狂させます。私はこの種の学習を行う必要がありませんでしたが、それは良かったです。

前もって言います。私は既にボワ＝ブリュにいました。この場所は危険でした。しかし私は自由に動きまわし、偶然からですが巧みに一人の人間を救います。私たちの避難所の端も、八十八ミリ砲の恐ろしい一斉砲撃を導いていました。全ての戦闘員たちは、このオーストリアの大砲はその音よりも速く砲弾が到達することを知っていました。或る夜、私たちは外にいました。私たちのうち一人は美容師の腕を持っていました。私たちは二発の爆風で避難所へ飛び込みました。三発目の砲弾の爆発は、殆どまさに私たちがいた場所で起こりました。二発が相次いで不発なのは珍しいことであり、ありそうも無いことです。何故なら、こちらには理由があっても、あちらには理由が無いからでしょうか。私は今でも百三十ミリ砲のことを思い出しますが、八十八ミリ砲と同じ位に速く、威力はまさにそれ以上です。それはポーモンでは私の鼻下で殆ど地面の下に入っていて恐ろしい唸る様な音を出しています。奇妙なのは、その長い砲弾が地面から出て来て今までよりももう少し遠くの空中で爆発することです。もしも各々の爆発が他のものと異なっていて、それぞれの詳細は特異で、謂わば例外的であることに気付くなら、それらの紛れ当たりにも少しもびっくりしないでしょう。小石と閃光の束による人物の正確な表情は唯一の出会いでしょうが、もしも前もってそれを描くことが出来たとしても全く疑わしいものです。事實は、全ての部下たちは殺されていませんが、注意力と避けるための術は同じ様なものであり、車に乗るのと一緒です。私は私のお手本に戻ります。もしも私たちが騒音や煙の中の大砲周辺で忙しく立ち働かされていたなら、砲弾の予告音を聞かなかったでしょう。私が殆ど何時も自分で見出していた比較的自由的な状況においては、怖い目に遭っても危険ではなくなります。何かの料理を作る時間が堪え忍ぶ間であっても、大変に滑稽な怖れの機会は多く無くなりました。何故なら腹這いになる前に鍋を置かなければならないからで、不決断があなたに働くからです。私は祝祭の時の昼食を思い出しますが、私はそこではスープを運ぶ人であると感じました。そして私は油で焼いた六つ程のオーストリア産の羊の股肉にびっくりした時、砲弾の並外れた集中砲火が起きて長く続きました。股肉は運命に任せることであり、その次には戻ることです。再び穴の中へ飛び込むことです。待つことであり、聞くことであり、荷物を引き受けることであり、走ることであり、焼肉の横で腹這いになることであり、結局のところ股肉と彼を救うことでありますが、それはそんなにも高尚な仕事ではありません。最悪なこともあります。新芽が吹く頃でしたが、不幸な男がズボンを履き替えて脱走しました。名前の分からない、栄光も無い不幸な人々の悲惨事が幾つもありました。大虐殺に関しては、一撃でなぎ倒された砲台の班があり、火薬庫の砲火は幾つもあり、私は恐怖を抱く様な話を沢山聞きました。何故なら、私たちから三百メートル離れた処で何回も起きたからです。しかし私は決してそこにいませんでした。戦争は遠くにしかない光景です。

しかしながら或る朝、私たちも一つの光景になりました。八時頃でしたが、家の中は全てが静かでした。洗面器とタオルで顔を洗うのに忙しかった私たちは、ヴェルダンの方を見ました。つまりヴェルダンの背後や右の方に欠落した大聖堂の影絵が見えました。一斉砲撃の多くの砲弾がそこに落ちたのです。時々私たちは砲火と煙を見ることが出来ました。私たちを愚かな儘にして

置く出来事が生じたのはこの時です。同じ場所の方向に、爆発というよりも寧ろ千台もの砲台の大音響を伴った噴出が生じたのです。赤褐色の大きな雲の中に数え切れない程の砲弾が爆発したのです。その全てが大空で生じました。その様なものからは何の考えも無い儘でした。人々は夢ではないかと疑います。しかしその日の朝、私たちは実際に体験した時間を持ったのであり、驚きの印象を実感したのです。というのもこの爆発は恐らく二時間も続いたからです。私がそのことを書くのは、まさに丁度その時にそのことが言われていたのを私は思い出しているからです。殆ど私は今ではそれを信じる事が出来ません。私たちはもう少し後で知ったのですが、タバンのトンネルが吹き飛んで、何千人もの人々が亡くなりました。人々が語った処によると、このトンネルは巨大な共同寝室と事務所を伴った火薬と砲弾の倉庫になっていたのです。私がその日に見たものは、噂から聞いた他の色々な災難を測る一種の基準を与えました。そして私は、戦争を語る色々な本の中の如何なる話からもそのことを発見しませんでした。私はイギリスの港でピクリン酸爆薬を一杯に積んだ船が吹き飛んだ話を引用しても、不確かな夢の様なものです。その衝撃で何千人もの人々が殺されました。私はドイツの或る村で有毒ガスが沢山貯蔵された場所の爆発も引用しますが、そこでは一万人の住民が死んだと言われていました。平和になってから農民たちが私に語った処では、シュマン・デ・ダムの下流にあるブールの町近くの弾薬保管所が爆発しました。それはニヴェル攻勢の時でした。そしてその人が言ったのは、私も知っている一軒の農家のことです。それは事件があった処から一キロメートル近い丘の上であって、火薬が置かれていたとのことです。私はそのことを屢々思います。何千人もの犠牲者のことも思います。熟考から力の蓄積、つまり労働の蓄積までの機会には決して限度がありません。それは人間の労働でしかありません。決してピクリン酸爆薬や雷酸塩やマスタード・ガスが自然の中にあるものではありません。そして化学は、ハンマーから他のものへの一撃をつけ加えるための一方法でしかなく、謂わば一時中断したエネルギーをその中に保存するための一方法でしかありません。証拠は人間の労働が巨大な超過分に委ねていることです。何故なら、結局のところ人々はこの巨大な発条を目指して更に食べて、着て、住んでいるからです。しかしながら多くの人々が忙しくしているのは壊すためでしかなかったのです。労働のこの力は、まさに人間の群衆以上には想像出来ません。或る賢明な農夫が一発で七五フランから八〇フランまでの砲弾を日中のみにおいて、一キロメートル四方の作戦区内で発砲するのを計算している声を私は一度ならず聞きました。人々は尋ねました、「支払いは全額でどの位になるのでしょうか」。労働が行われて労働者が生活した以上、人が消費するもの全てにお金が支払われるのであると私は自分自身に答えました。しかし私は多分、余り簡単にこの考えを敢えて提案しませんでした。そして、労働や富や超過分や浪費癖とは何か、私は大して前進しなくても、もう一度探求します。何故なら、飛行機の形をして空中で爆発する実際の労働と、空想上の本当らしい借金や財産との間にどんな関係があるのかです。しかし同様に誰が数々の種類の展示や、銀行家たちの虐殺を行うのでしょうか。一方は他方に結び付いています。しかし、その関係は何処にあるのでしょうか。無数の虚構が、数々の種類の変り易い夢想を形づくって実際に多くの富を生むからでしょうか。そして今度は戦争の番であり、戦争は労働の一種の保管庫を展示することでしかないのでしょうか。どんな弾薬の保管庫も最後には有害である様に、どんな権力者も最後には有害になるのでしょうか。もしも人々が

エネルギーを蓄積すると同時にエネルギーを思考したなら、その努力を慎重さからきちんとした地点へ持って行かせるでしょう。経済学の中に欠けているのは物理学なのです。（完）

- （1）ヒンデンブルク・ラインは、ドイツ軍が築いた要塞群で、大戦当初はパリ付近まで攻め進んだが、第一次マルヌの戦い（1914年9月）などで後退した。
- （2）シュマン・デ・ダムは、北仏・エーヌ県中央を走る道路で激戦地となった（1917年4月）。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榧』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ（たかしま りみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都在住。

日本詩人クラブ会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年）

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパブの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第54号

2019年 1月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/125219>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/125219>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト